

2015. 1. 6 (火)

「えいっ！」という一歩から新年を

打 樋 啓 史

クリスマスシーズンの結びとしての
公現日／エピファニー

12月の終わりにここで一緒にクリスマスをお祝いし、冬休みを経て、新しい年を迎えました。新年最初のチャペルにこうして集まることができて嬉しいです。そして、今日1月6日はキリスト教では「公現日」（エピファニー）という祝日です。クリスマスのお話してきたように、クリスマスは12月25日、正確には24日の夜から始まります。それまでの1カ月ほどはアドベント／待降節というクリスマスを待つ期間で、いよいよ12月24日の夜にクリスマスが始まるのですが、それは1日だけで終わってしまうわけではないのです。12月24日の夜から今日1月6日まで12日間、クリスマスシーズンが続きます。これが本来のクリスマスの祝い方です。

キリスト教圏の国々では、この12日間は家族や友人が集まってお祝いのシーズンが続く、その中で新しい年を迎えます。キリスト降誕の喜びの中で「ハッピーニューイヤー！」があるのです。その12日間のクリスマスシーズンを締めくくるのが公現日という祝日で、今年は新年最初のチャペルがこの日となったので、特にそのことをお祝いして、

チャペルを行ないましょう。

公現日／エピファニーのテーマは、先ほど読んだ聖書の物語、いわゆる「3人の博士たち」が幼子イエスのところを訪ねてきて、贈り物を捧げたという物語です（マタイによる福音書 2: 1-12）。つまり、クリスマスに生まれた救い主イエスが最初は隠れていたわけですが、初めて人々の前に「公に現れた／公現した」。これを祝ってクリスマスのシーズンが完結するということです。この3人の博士たち、聖書では「東方の占星術の学者たち」となっていますが、この人たちが、ユダヤに救い主が生まれたことを知らせる星を見つけて、その星を追いかけて旅をしてきたという話です。

これまでも「3人の博士」と言ってきましたが、実は聖書には人数は書いていません。「占星術の学者たち」と複数形で書かれているだけで、人数は分からない。新約聖書の元の言語であるギリシア語は、「マゴイ」って書いてあるだけです。「マゴイ」というのは「学者」を意味する「マギ」という言葉の複数形です。そのように「3人」とは書いていないのですが、「黄金」「乳香」「没薬」という3つの贈り物を捧げたから「3人の博士」と伝統的に言われるようになり、後には名前まで付けられたのです。「カスパール」「メル

キオール」「バルタザール」という名前で、この3人についてのいろんな逸話がそこから生まれてきたりもしました。

「3人の博士たち」とは誰か

そのように、「3人」とは書いていないけれど、伝統的には「3人の博士たち」の物語なのですが、この「占星術の学者たち」とは誰なのかというと、ペルシアの宮廷で研究をしていた占星術学者のことだろうと言われていきます。古代のペルシアでは占星術が盛んだったようです。今でこそ「占星術の学者」なんて言うと怪しい感じがするかもしれないけれど、当時占星術というのは学問の最先端だったようです。そういう意味では、ペルシアの本当の学者たちだったんです。

しかも宗教的にはゾロアスター教徒です。これが面白いところです。イエスはユダヤ教の世界の中でユダヤ人として生まれて、後にキリスト教が始まっていくんですけども、ユダヤ教ともキリスト教とも関係のないゾロアスター教徒の学者たちが最初にイエスを拝みに来たってという話なんです。その人たちに救い主としてのイエスが現れたっていう、つまり生まれたイエス・キリストは、ユダヤ人だけの救い主ではなくて、民族や宗教を超えた世界の救い主なんだっていうことがここでは示されているわけです。

でも面白いでしょう。宮廷で研究に従事していた学者たちが、輝く星を見つけて、ペルシアからユダヤのベツレヘムまで旅をしてきたっていうんですよ。聖書には、「その時、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て」というようにごく簡潔にしか書かれていませんが、これってすごい距離ですね。し

かもその当時、旅なんていうのはそんなスムーズじゃないから、おそらく命がけの旅を何カ月も続けてきたっていう、そういう話です。不思議な星を見つけて「あっ、あれはきっと何か素晴らしいものと関係がある」と信じて、ただその星を目当てにして、旅をしてきた、そういう話なんです。

ユダヤに着いた彼らは、最初ヘロデ王のところに行きます。その時のユダヤの王がヘロデという人だったんですね。ヘロデは学者たちの話を聞いて関心を示すようなふりをします。「私もその幼子に会いに行きたい」とか言って。でも、これ実はうそで、彼は自分の地位を脅かす者が生まれたのではないかと恐れているんです。そしてその幼子をこの後で殺そうと目論みます。今日読んだ物語の続きでは、ヘロデ王がベツレヘム周辺で生まれてきた2歳児以下の男の子を皆殺しにするという話が出てきます。その時、イエスの一家は天使に導かれてエジプトに逃れるんです。そのような、この世の権力と暴力が絡んでくる物語でもあるのです。

「動き」に溢れる物語として

さて、今日特に注目したいのは、この学者たち、いわゆる3人の博士たちの「動き」についてです。この物語、すごく動きが感じられる話ですね。聖書の物語というのは淡々と記されていますが、想像力を膨らませると生きいきとした動きがあるんです。つまり、すごい道のりを星の光を目当てにして旅してきた学者たちの動き、それを読み取ることができます。まずは心の動きがあります。「あの星の光、頭では知り尽くせないけど、何か素晴らしいものを告げ知らせている、あそこ

に行かなければ！」というような心の動き。続いて、そこから突き動かされるように旅に出かけて行った男たちの体の動き。そのように、躍動感にあふれる物語だと思います。

1月3日にアメリカンフットボールの日本一を決める試合、ライスボールがありました。学生日本一のが関西学院大学のKGファイターズは、残念ながら社会人日本一の富士通に敗れましたが、すごくいい試合で、僕は感動しながらテレビで観戦していました。アメリカンフットボールの試合というのはすごく躍動的で、素早い動き、激しい動きに満ちていて、テレビの前で興奮しながら見ていたんですけど、あの選手たちの動きを想像してみてください。もちろん、博士たちの動きにはインターセプトも、タックルも、ロングパスもないし（笑）、そういう激しい動きではありませんが、同じ躍動感をここに感じ取ってほしいと思うんです。

この博士たちの躍動感。宮廷という、ある意味安定した場所で研究を続けていた男たちが、その星の光を見つけた時に居ても立ってもいられなくなって、思い切って「えいっ！」と旅に踏み出していった。この「えいっ！」という一歩を踏み出した人たちの物語です。その人たちが最初に幼子イエス・キリストに出会ったという、これがクリスマス物語の完結としての公現日の物語です。

キリスト教では、クリスマスの出来事とは、神様が人となってこの世を訪れたという意味をもちます。貧しい幼子になって、人間の世界の苦しみの真中に神様が入ってきた。それがイエスの降誕の出来事です。だとしたら、最初にある「えいっ！」という動きは神様の動きです。「イエスはヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになった」と

最初に書いてありましたが、そこには実は神様の方からの動きが示されているのです。

神様がこの世を愛して、人間を愛して、その人間が罪によって傷ついている様子を見て、もう居ても立っていられなくなって、「えいっ！」と、赤ちゃんになってこの世に生まれた。その動きに突き動かされるようにして、この博士たちも「えいっ！」という勢いで長い旅を歩んでいった。そういう第一の動きと第二の動きがこの物語の中には見えるのです。

私たちにとっての「えいっ！」 という一歩とは

神様の動きが大前提にあって、それに励まされて博士たちは歩み出したということですが、僕たちはどうでしょうか。新年を迎えて、今日この公現日をもってクリスマスシーズンを終えて、新しい年の歩みが始まっていくのですが、この博士たちの姿に学べたらいいですね。この季節、われわれもやはり、神様がこの世を愛してクリスマスに「えいっ！」と、いって幼子として世界を訪れてくださったことに励まされて、また新年の希望に励まされて、それぞれが思い切って新しい一歩を踏み出す時にできればと思います。

どうでしょう、皆さん、自分が今思い切って踏み出さないといけない一歩があるとしたら、それは何ですか。そういうことってないですか。何となく面倒くさいから放っておいたこと。「これをしなくちゃ」と分かっているけど、不安や恐れがあったりして、ずっとそのままにしていたことってないですか。僕は結構あるんです。気付いたら、「これをやらなければ」と思いながら10年たつたと

か、本当に恐ろしいですね。「あっ、蛍光灯の電気切れてる。替えない」と思いながら1年たってしまうような、そんな感じです。毎年、「今年の抱負」とか言うのですが、気付いたら、もう永遠に同じ抱負を言い続けていて、「永遠の抱負」みたいな（笑）、そういうことって、皆さんにもあるんじゃないですか。

それってやっぱり「えいっ！」と思ってやらないと、多分ずっとそのままです。僕は最近年をとったと感ずることが多くて、「やはりこれではいけない」と感じるようになって、今まで放っておいたことを結構やるようにしているんですよ。そして今更分かったんですが、放ったままにしていたことをやってみるといのは、やはりいいものです。気持ちがいいし、何か新しいことにつながってきます。「何で今まで放っておいたんだろう」と思ったりします。

きっと学生の皆さんもそれぞれの課題、「これ、やらんとあかん」と思っていたこと、ぜひこの新年の、エピファニーの時、良い機会です。博士たちの勢いに連なって、「えいっ！」といて、一歩踏み出してみたらどうでしょう。星の光、神様の光、希望の光を見つめながら、「えいっ！」といて、信頼して一歩踏み出してほしいと思います。

ローマ教皇フランシスコのこと

もう一つ言えば、「えいっ！」という一歩は、もちろんそれぞれの課題やつとめ、それも大事ですが、やはりキリスト教的に言うと、それが他者のための一歩、愛のための一歩であるということ、これが大事かなと思います。だって神様がイエス・キリストとして

このクリスマスにこの世にお生まれになったというのは、人類を愛してそうされたということ。クリスマスは愛の季節です。神の愛がこの世界を訪れた季節です。だから僕たちの一歩も、やはり愛のための一歩、他者のための一歩、誰かのための一歩だったら素晴らしいと思います。

カトリック教会の現在の教皇であるフランシスコという方をご存じですか。よく「ローマ法王」と言われますが、あれはメディアが使う言葉で、正式には「ローマ教皇」と言います。ローマ教皇とは、世界のカトリック教会の首長で、全カトリック信者の精神的指導者のことですが、このフランシスコ教皇は本当に素晴らしい人で、史上初のラテンアメリカ出身、アルゼンチンの出身の教皇です。

就任以来、教会のいろんな改革に大胆に着手してきたのを皆さんも聞いたことがあるかもしれませんが、特に去年、大きな出来事があったのをご存じですか。アメリカとキューバが国交正常化に向けて一歩踏み出し、オバマ大統領がそれを宣言しましたが、その仲介役をしたのがフランシスコ教皇だったので。教皇は、自分が南米の出身なのでキューバとも距離が近いということもあって、キューバにもアメリカにも交渉して、そういう結果につながった。だって、アメリカとキューバって、資本主義の大国と共産主義の小国がずっと争って、一触即発の核戦争がいつ起こってもおかしくないみたいな状態がずっと半世紀続いてきたわけでしょう。それが国交正常化に向けて一歩踏み出したというのはすごいことです。そのきっかけを作ったのが、カトリック教会の代表のローマ教皇だったので。

歴代いろんなローマ教皇がいましたが、こ

のフランシスコという教皇は本当すごい人だなと思って、僕は尊敬しています。代々の教皇はバチカンの宮殿に住んできたんですけど、フランシスコ教皇はそこに住まずにゲストハウスのような普通の家に住んで、車もまったく普通のものに乗って、きらびやかさを排除してきました。自分の誕生日には、バチカンにいるホームレスの人々を招待してパーティーを開いたりもして、貧しい人々や辛い思いをしている人々と共に歩む教会の姿勢を一貫して打ち出してきました。

またバチカンというのは、財政面でグレーなところがあると批判されていたのを、改革してクリーンにしようとして、そのためにマフィアから命を狙われるようになりました。さらにパレスチナとイスラエル両方の指導者を呼んで、和解のための祈りの場を設けたりもしてきました。そして、今回、キューバとアメリカの国交正常化のために大きな一歩を踏み出すことに貢献したのです。

このフランシスコ教皇は、本当に「えいっ！」と行って行動してきた人です。恐れて誰もやらなかったようなことを、面倒くさいどころか命の危機にさらされるぐらい危険なことを、「えいっ！」と行って、どんどんやってきた人です。だから去年2013年に、アメリカの『TIME』という雑誌がフランシスコを“The Person of the Year”（今年の人）に選んだんです。「いつくしみに焦点をあて、良心の新たな代弁者となった」というのがその理由でした。

やはり「これぞキリスト教だな」と思います。キリスト教という宗教の存在意味はこういふところにあるんじゃないかと。キリスト

教を絶対化して、キリスト教を大きくするというような方向ではなくて、本当にこの世界の和解と平和に、辛い人々が希望を持って生きようになるために、そのために自分が一歩踏み出していくという方向です。キリスト教の代表者の一人として、やはりこのローマ教皇はそういう「えいっ！」という他者のための一歩を踏み出してきた人だなと思います。

愛のための一歩を

3人の博士たちの「えいっ！」という一歩、教皇フランシスコの「えいっ！」という一歩、それらに学びながら、僕たちもそれぞれの課題、放ったらかしにしていたことやそのままにしていたことについて、新年の気分の新しいうちに、ぜひ具体的に一歩「えいっ！」と踏み出してみたいですね。

その一歩の中に、愛のための一歩があれば素晴らしいと思います。誰かにあいさつしてみるとか、誰かを許すとか、誰かに謝るとか、そういうことかもしれない。あるいはこの社会の中にはいろんな問題があり、本当にしんどい思いをしている人たちがたくさんいる。そういう現実にも少しでも関心を持って知ろうとすること、学ぼうとすること、これもまた愛のある一歩になるんじゃないですか。

何らかの形で、そういう愛のある一歩を、3人の博士たちと一緒に踏み出す、そういうクリスマスシーズンの締めくくり、新年の始めになればと願います。

(社会学部宗教主事／教授)